

学を荒野と表現しそれを切り拓いたと書く理由がよくわかる。

上巻の最後に著者は「医学上の発見の偶然性と serendipity」の1編を載せて、多くの医学・科学の発見がセレンディピティの賜物であることを書いている。しかし本書を読むことによりセレンディピティに遭遇できる僥倖には、必然的な知識と教養または感性が必要なことを紹介者は感じる。今年、2007年 Morton A. Meyers により書かれた『HAPPY ACCIDENTS: Serendipity in Modern Medical Breakthroughs』が小林力訳『セレンディ

ピティと近代医学—独創、偶然、発見の100年』として中央公論新社から発刊された。Meyers は内科・放射線科医ということであり、とり上げられているエピソードも異なるものが多いが、合わせて読み比べることも現代の科学史・医学史に興味を持つものにとっては楽しみとなるであろう。

(渡部 幹夫)

[東京医学社、〒102-0085 東京都千代田区六番町7-36、TEL. 03(3231)8741、2010年、上巻204頁/下巻224頁、非売品]

梶谷光弘 著

『松江藩校の変遷と役割』

近世の藩校教育に熱い視線が向けられている。日本の国際的地位が低下し、内政面でも閉塞感が強まるばかりの昨今、改革を断行し、人材の育成に成功した諸藩の成果が、温故知新の発想のもとに再び脚光を浴びつつある。

中国筋では萩の明倫館を筆頭に、福山の誠之館、津和野の養老館、備中松山の有終館などが特色ある藩校として浮かぶが、徳川家の連枝にあたる松江藩(18万6千石)も早くから教育の充実に努めた山陰の雄藩であった。雲州松平家は家康の孫を藩祖とし、津山、福井、前橋、明石の諸藩と同族で、寛永15年の入部以来、一度も移封なく、10代234年に及ぶ治世を誇った。

松江藩校の文明館(明教館、修道館)は6代宗衍の宝暦7年に、医校の存濟館は7代治郷(不昧公)の文化3年に創建された。また講武所の大亨館も同じころ設けられ、文武医兵にわたる教育の基盤が整うのは、名君・不昧公の時代であった。本書はこれら松江藩学の史的変遷と、学問・教育に関わった人々の事蹟を周到にまとめ、広く読まれることを目的として平易に著わされた良書である。

ところで島根県が儒・医学史、藩学史研究の先進県であり、各分野の著述が完備する地域である

ことを知るものはそう多くあるまい。儒学では谷口為次『島根儒林伝』(昭和15年)、佐野正巳『松江藩学芸史の研究/漢学篇』(昭和56年)がある。医史は米田正治が『島根県医家列伝/正・続』(昭和47・53年)、『島根県医学史覚書』(昭和51年)をものし、医学分野における島根県の後進性を見事に否定してみせた。また著作ではないが、東大史料編纂所長をつとめた桃裕行は戦前の本誌に「松江藩の洋学と洋医学」を寄稿している。桃氏は藩校創始に際し、中心的役割を果たした藩儒・桃白鹿の後裔である。藩学史によく目配りがなされたものでは内藤正中『島根県の教育史』(昭和60年)がある。これらによって県内旧藩の特色ある教育・文化が多角的に論じられ、明らかにされていることはまことに羨ましい限りである。

本書も上記各書の内容をふまえるが、近年、松江藩医史に関わる論考を続々と発表している著者の手になるだけあって、医学教育と西洋学導入に関する各節は、自らの地方医史研究の成果を十二分に活用し、従来にない充実した内容となっている。話題では浪費家9代斉貴の生涯と彼の蘭学愛好の実態、ならびに西洋学移入に際しての姻族佐賀藩の影響を指摘する点が興味深い。もともと松江藩の医学教育は先進的位置にあったが、その影

響は維新後も続いたと見え、明治3～5年にかけて旧藩領11郡に対し、医学教授のための郷校を設置したという一件は特に注目される。このような話はあまり耳にしたことがない。場所は全て寺院があてられ、試業もあったという。郷村医の所管形態、引痘業務等との関連を含め、維新期の村落医療や在郷医養成システムの解明に一石を投ずる事例となることは間違いない。

藩政改革は治郷の腹心・朝日丹波を中心に進められ、人参、木蠟、鉄などの特産品を専売化するなどで、寛政期にかなり改善し、8万両の余剰金を生ずるに至った。教育の発展は財政的安定が確保されてこそ実現される。その結果、さらなる改革の推進力となる有能果敢な人材が育ち、19世紀の初めに向け、松江藩教育は最も充実した時期を迎えたと著者は結論する。実はこの点を見逃してはならず、松江藩学のピークが化政期にあり、天保以後の体制変革期にあったと記さぬ点は極めて重要であろう。倒幕派の西南雄藩が一樣に幕末に飛躍する点との大きな相違は、今後じっくりと考えるべき問題であるように思う。

本書は「松江市ふるさと文庫」シリーズの第11冊として刊行された。よって啓蒙の意図を有する入門書、概説書に分類するのが適当であり、決して専門性の高い学術書ではない。だが内容的にはそれに見劣りせぬ水準が保たれている。叙述は詳

細で実証性に富む。また丁寧な語り口調はかえって説得力を生み、加えて人名・地名の多くにルビをふる点も他県人にとっては重宝この上ない。かつ図版が豊富に挿入され、巻末の「参考文献」に島根県立図書館が所蔵する雲藩関係の貴重文書を列記する点にも、著者の学問に対する真摯な姿勢が反映する。松江藩における儒学・医学の史的展開は本書をえて、初めて全体の俯瞰が容易となったのであり、その功績は大きい。

著者は副題に「財政再建と人材育成は藩校から始まった」と添え、我が国の経済・教育再生への手がかりを郷土先賢の知恵と行動に求めようとしている。評者は出雲の小学校を舞台とした『白い船』という映画が好きである。あれを見たのと同じ感銘を本書読了時に受けた。著者の人材育成にかける教育者としての情熱と使命感は行間に横溢し、その気概に打たれたのである。《地方医史の時代》が訪れる気配が濃厚ないま、著者の力によって雲石医史がさらに開拓されることを期待する。

(亀田 一邦)

[松江市ふるさと文庫, 〒690-0826 松江市学園南1丁目17番24号 松江市教育委員会文化財課文化財係, TEL. 0852(55)5294, 2010年6月, A5判, 104頁, 800円+税]

吉良枝郎 著

『明治期におけるドイツ医学の受容と普及

——東京大学医学部外史——』

本書の著者である吉良枝郎氏は、順天堂大学と自治医科大学の名誉教授で呼吸器内科を専門とされている。10年ほど前より江戸時代から明治期にかけての医学の歴史を研究して、著書として発表しておられる。前作は『日本の西洋医学の生い立ち——南蛮人渡来から明治維新まで——』、『幕末から廃藩置県までの西洋医学』であり、本書はそれに続く第3作目である。

本書で扱われる時代は、明治4年のミュルレルとホフマンの来日から明治20年代のあたりまでである。この時代に起こった医学教育および医師資格付与制度の変更や、医学校の興廃については、『学制百年史』、『医制百年史』、『東京大学医学部百年史』といった公式な通史や、医学・医療の歴史に関する著作の中でよく扱われている。この著作では、これまでの通史や著作を踏まえた上